



旧山口藩庁写真（戦前内務部写真169-1）

防長紀行

文書館資料で
旅する山口県

＊02

名物 ②

幕末維新期の山口とビール(1)

《幕末維新期の山口とビール》

幕末、開港により横浜に外国人居留地が出来ると彼ら向けにビールが輸入され始めます。明治には横浜や東京に西洋料理店や牛鍋屋もでき、ビールなど西洋の酒が提供されました。明治3年(1870)、ノルウェー人コーブランドにより横浜にビール工場が建設されるなど、次第に国産ビールも出回りはじめます。しかし明治初期、ビールはまだ高級品で、社会の富裕層が特別な時、特別なもてなしのために飲むものでした(参考:キリンビール株式会社編『ビールと日本人』『図説ビール』)。

当館には、幕末～明治初年の山口において、毛利敬親・元徳父子、および維新の三傑大久保利通・西郷隆盛・木戸孝允とビールとの関わりを伝える史料が数多く残っています。幕末維新时期、地方都市山口でもビールが飲まれていたこと、ビールが贈り物として重宝されていたことがわかります。すでに江後迪子『萩藩毛利家の食と暮らし』で触れられた事例も含め紹介します。

《木戸孝允と山口とビール》

明治2年末、山口藩は、それまで藩の軍事力を担ってきた諸隊を解隊し、兵士を精選の上、常備軍の設置を図ります。この時の選抜に漏れ、不満を抱いた旧諸隊士たちが不穏な動きを示し、明治3年1月下旬には山口の藩庁を包囲する事態となります。いわゆる脱隊騒動です。藩を揺るがし、他藩からもそのなりゆきが注目されたこの事件に対し、2月木戸孝允は自ら軍を率いて反乱を鎮圧し、11日藩庁の囲みを解きました。3月には90名を超える関係者に斬首などきびしい処罰を下しました。その後も不穏な状況は続き、4月初め、上関や徳地で再挙した脱隊士が鎮圧されています。

2月13日、敬親は、騒動を鎮圧し脱隊兵らによる藩庁の包囲を解いた木戸に対し、シャンパン1瓶を下賜しています。感謝と慰労の気持ちでしょう(「奥日記」毛利家文庫19日記50)。

さらに、各地の騒動が鎮静化した後の4



木戸孝允(毛利家文庫81写真史料97より)



木戸孝允肖像絵葉書(雨村家文書299(9の5))

月10日および12日、敬親と知藩事毛利元徳が木戸および広沢真臣を招いて宴を催します。「奥日記」によれば、10日敬親が御屋形(敬親居所・藩庁)で木戸・広沢に食事と酒を振舞い、12日元徳が御屋形に近い伊勢門前の五十鈴御殿(元徳居所)に両名を招き、食事と酒、そしてビール2本を振る舞っています(下記写真)。

『木戸孝允日記』4月12日条には、この日の出来事が次のように記されています。

「御夫婦様(注：元徳夫妻のこと)御揃にて御酒を賜ふ、不覚大酔、十二字頃退散、広沢も同様なり」

この日木戸は、知藩事元徳夫婦の前で不覚にも「大酔」し、夜中12時に退出したといえます。脱隊騒動を武力鎮圧し、多くの者を厳罰に処した後、木戸が山口で飲んだ酒とビール。それはどんな味がしたでしょう。「大酔」した、この時の木戸の心中とは。

なおこの日広沢は、敬親に「サンパン酒(シャンパン)」6本および海苔1箱を献上しています。

4月18日夕方、元徳はふたたび木戸・広沢を招し、両名に菓子と「サンパン」を下賜しています。

《萩町人鹿島家から木戸へビールの贈り物》

藩政期、萩呉服町に居を構えて商売を営み、幕末には藩から山口に屋敷地を与えられ活動した町人鹿島正右衛門が、明治3年3月2日に木戸孝允にあてたと推測されている書状があります(『木戸孝允関係文書』3)。『木戸孝允日記』同年3月5日条には「鹿島庄右衛門より書状を送る」とみえています。

書状は、注文された煙草312玉2箱を木戸へ送った際のもので、この時木戸は山口に、鹿島正右衛門は下関にいたようです。鹿島は注文の煙草とともに、「ビール」(ビール)3本、「唐筆」(中国製の筆)10本などを木戸に贈っています。「どうぞお試しください。よろしければ何本でも送ります」と記しています。ビールは下関で購入したのではないでしょう。

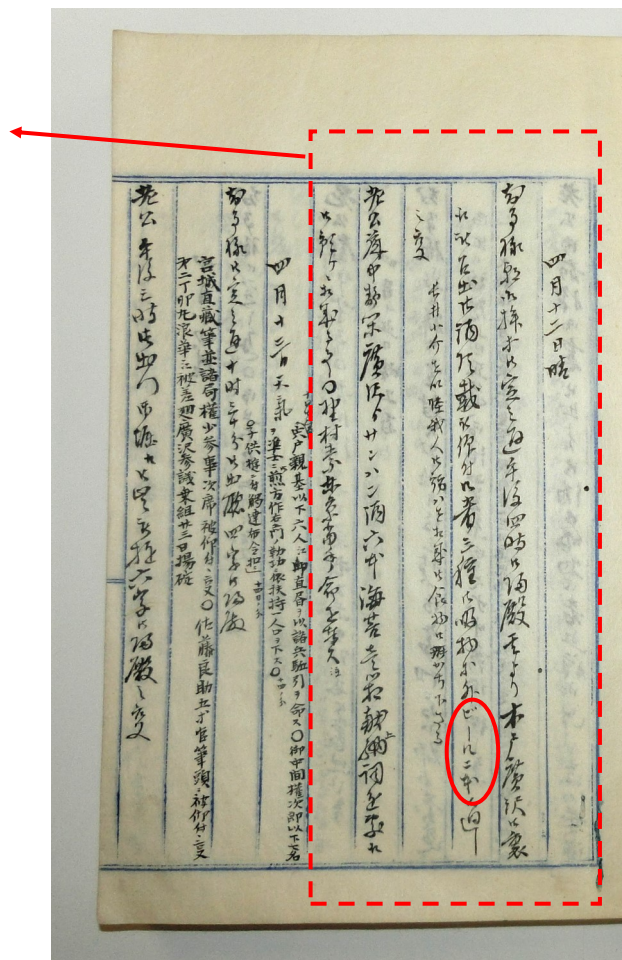
なお、この書状は含まれていませんが、鹿島家の活動を示す「鹿島家文書」が当館に寄託されています。

四月十二日晴

(毛利元徳) 知事様朝御拝等御定之通、午後四時御帰殿、其より木戸・広沢御裏江被召出、御酒頂戴被仰付、御肴三種御吸物等外**ビール二本**御廻し之事 長井小介を以怪我人御訪ハセ相成、御食物御辨かち下さる

(木戸孝允) (広沢真臣)

(毛利敬親) 老公殿中静閑、広沢方**サンパン酒六本**・海苔壹箱献上、調進処江御預ケニ相成る事○野村素東京当年ノ命を奉ス



○「奥日記」明治3年4月12日条